

# Common Sense Press

## vol.028

### Sep.2016

本稿は水野和夫著『株式会社の終焉』のはしがきとあとがきです。本書は9月30日、ディスカヴァー21社から刊行されます。構成は以下の通りです。

- 第1章 株高、マイナス利子率は何を意味しているのか？
- 第2章 株式会社とは何か？ その発展と限界
- 第3章 株式会社の将来は？ 21世紀の処方箋

#### はしがき

これまで、『100年デフレ—21世紀はバブル多発型物価下落の時代』（日本経済新聞社、2003年）に始まって、『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』（日本経済新聞出版社、2007年）、『終わりなき危機 君はグローバリゼーションの真実を見たか』（同、2011年）の3部作で、資本主義は限界を迎えているにもかかわらず、衰えることのない、成長でなんとかかなるという「成長信仰宗教」を批判してきました。この3冊の延長線上に、『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書、2014年）があります。

本書では、資本主義が資本の自己増殖ができなくなったとき、その主役である株式会社に未来があるのかどうかについて考察してみました。株式会社が主題です。

資本主義が終焉するのなら、当然株式会社に未来はありません。厳密に言えば、現金配当をしている株式会社には未来がないということです。もっと配当をと要求する株主の要請に忠実に応えるため現金配当を高めようとする株式会社はまもなく、明治維新の後も鬻ぎつけたり刀をさしたりしていた武士と同じ存在になるでしょう。

あるいはそれは、「長い16世紀」にオランダの風車に竹やりで突進するドン・キホーテです。セルバンテスは、来るべき時代は工業の時代であり、それを象徴しているオランダの巨大な風車に、中世の騎士道を象徴する竹やりで対抗させて、無駄な抵抗を続ける旧世界のチャンピオンであるスペイン世界帝国を風刺したのです。

本書がその流れを継ぐ『資本主義の終焉と歴史の危機』の「歴史の危機」とは、既得権益が壊れていくプロセスですから、権力をもっている既得権益者は抵抗します。最低でも1世紀、4世代を経ないと、次の世の中の姿はみえてこないでしょう。「うちのおじいちゃんは偉かった」と自慢している孫はあちこちにいるものですが、さすがに孫が曾祖父、曾祖母の影響を受けることはないからです。

ホイジンガが『中世の秋』で指摘しているように、中世から近代へ移行するとき、旧勢力が盛り返し新興勢力が後退したり、新興勢力がまた押し返したりを繰り返して

ながらも、時代は徐々に近代勢力の勝利へと向かっていきました。来るべき22世紀はどんな社会にしたいか、これから各国が英知を絞り旗を掲げて壮大な実験を重ねていくことになります。

ヨーロッパは国民国家の枠を超えてEUをつくって、一つの旗を掲げました。米国もまた2016年11月の大統領選で、別の新しい旗を掲げる可能性があります。

そのEUはそもそも、ヴィルヘルム1世に忠実に仕えたビスマルクが、フランスで起きた市民革命はヨーロッパ全体にとって今後避けられないことだと認識した上で、君主制維持に腐心したことがその基盤になっています。ビスマルクが時代を読み違えていれば、今のドイツ中心のEUはなかったわけです。

翻って、日本はどうでしょう。近代の先頭に立ったにもかかわらず、相変わらず近代強化作戦をとっていますが、これは止まった巨大な風車を竹やりで高速回転させようと突っついているようなものです。21世紀に入っただけで「骨太の方針」、続いて「アベノミクス」と成長路線まっしぐらです。そして、おそらく2020年の東京五輪までは「成長がすべての怪我を治す」と考える、その近代勢力が力を増すでしょう。

でもそれも、向こう100年間という長期の時間でみれば、ほんのさざ波にすぎません。最も避けなければならないのは、時代の歯車に歯向かったり、歯車を逆回転させたりすることができると思ってしまうことです。

現在の21世紀は、成長の積み重ねの上にあるわけではありません。成長を目指せば目指すほど、21世紀の潮流とずれてしまうのです。これから70年の間で、22世紀の勝負はついていることを認識することが最も重要です。

#### あとがき

「前向き」とはいったい何のことか

これまでの拙著について、資本主義が終わると主張するが、その次にどういった世界がくるのか、まったく述べていないと、よく指摘されます。それに対するわたしの答えは、「それがどうかしたのか」です。

『時間かせぎの資本主義』（2016年）の著者ヴォルフガング・シュトレークは、序章でアドルノがいうであろう「それがどうかしたのか」を次のように紹介しています。

「問題を問題として記述している人に対して、分析するなら同時に解決策も示せと迫るのは間違いだと考えている。（中略）その解決策が見つからない、あるいは少なくとも、今ここで実現できるような解決策が見あたらないということは十分に起こりうる。では、いったい『前

向きなもの』はどこにあるのかと、非難をこめて問う声があるかもしれない。その時こそ、(中略)アドルノならば、もちろん私などよりずっとしゃれた表現で、こんな意味のことを言ったにちがいない。前向きなものがまったくないからといって、それがどうかしたのか、と」(p. 8-9)。

「歴史の危機」において最も疑ってかからないといけないうのは、その時代を支配する概念です。近代において支配的な概念は、ペーコンのいう「進歩」や、デカルトのいう「合理性」です。近代は「進歩」と「合理性」ですべてを解決できるシステムでした。「進歩」と「合理性」を経済学の観点からいえば、「成長」です。「成長」とは、去年より多くなっているということですから、言い換えると、「前向き」ということになります。

アドルノの言う、「前向きなものがなくてそれがどうかしたのか」というのは、わたしなりに解釈すると、「既成概念を取り払ってから質問してほしい」ということなのでしょう。

コペルニクスも「前向き」な解決策は一切示していません。古代と中世を支配して誰もが疑わなかったアリストテレスの宇宙論(閉じた宇宙、コスモス)に対してたった一人で反旗を翻したのが、敬虔なカトリック信者であるコペルニクスでした。

近代人の第1号の名誉を授かった彼は、アリストテレスの宇宙論を否定すれば、ローマカトリック教が支配する中世の秩序を根本的にひっくり返すことを自覚していました。実際、ローマカトリックもプロテスタントのルターも、コペルニクスを馬鹿者とけなしていました。既成概念に取り憑かれた人々からみれば、彼こそが「後ろ向き」のことを言っていることになるのですから。

だから、コペルニクスは、『天球の回転について』の出版を亡くなる直前までためらっていたのです。そして、1543年、刷りあがったばかりの『天球の回転について』のはしがきを読んで、息を引き取ったのでした。

コペルニクスは、来るべき世界はこうあるべきだと、解決策を示すことはしませんでした。まずは、「宇宙は無敵だ」という事実を発表しないことには「前に進まない」のです。もちろん、自分をアドルノやコペルニクスと比較しているではありません。天才でもわからないことをわたしに聞かないでほしいといいたいです。

まずは減益計画の公表と現金配当の廃止から

現在の株式会社が主流となったのは、近代、とりわけ19世紀半ば以降の「鉄道と運河の時代」になってからのことにすぎません。そして、そのわずか100年余後の1970年代には、それを支えていた近代システムがおかしくなっていく。ニクソンショック(1971年)、2度にわたる石油危機とイラン・イスラム(1973年、1979年)、ベトナム戦争における米国の事実上の敗北など、近代が前提としていたことが次々と崩壊していったのです。

それから、50年近く経ちます。1世代が過ぎ、2世代目に入っていますから、あと、70年くらいたった21世紀末には、次の世界の姿が見えてくることでしょう。本書で主張したいのは、あらゆる思考のベースを、近代システムのベースである「より速く、より遠く、より合理的に」から、「よりゆっくり、より近く、より寛容に」にしていくことです。これを株式会社に当てはめれば、毎年毎年、増益計画を立てるのではなく、減益計画で十分だということです。資本を「過剰」なまでに蓄積して「より速く」行動することは、将来の不良債権を積み上げていることに等しいからです。

企業が利益を確保するのは、消費者があれもこれもほしい、しかも早くほしいと言っているときです。そこでは「より多くの利益」を計上して、大工場を建設。大量生産して、大規模店舗であれもこれも品揃えすることが、国民の幸せにもつながりました。しかし、もはや多くの人は、あれもこれもほしいとはいっていないのです。

フランス革命直後に「供給みずから需要をつくる」といったのはジャン＝バティスト・セイ(1767—1832)です。この「セイの法則」は、フランス革命でそれまで第1、第2身分の人にしか許されていなかった欲望を、第3身分の人に開放したから成立した法則です。いまや、あらゆるモノ、そして資本が「過剰・飽満・過多」となったため、「供給みずから不良債権をつくる」ようになったのです。

本文の中でも述べたように、「より近く」を株式会社に当てはめれば、現金配当をやめることです。そうすれば、地球の裏側からは株主はやって来なくなります。経営者は「もっと配当を」と叫ぶ株主の要求にいかに応えるかなど、短期的なことに頭を悩ますことなく、向こう100年の経営計画を「ゆっくり」考えることができます。

そしてサービス配当に切り替えれば、株式会社は「より近く」、地域会社になります。会社が地域会社になる決意をすれば、地域の株主も短期売買をやめるでしょう。空間が「無限」になることによって株式会社が誕生したわけですから、それが「閉じ」れば、株式会社も閉じることが自然の成り行きです。

「より寛容に」は、過剰な内部留保金を国庫に戻すということです。

こうした提案は、近代成長教の人からは「後ろ向き」と非難されます。しかし、時代の歯車が逆回転すれば、「後ろ向き」が「前向き」になるのです。

すでに、中世的な現象があちこちに現れています。たとえば、ゼロ金利が示すのは、1215年以前の世界に戻って、貨幣は「種子」ではなく「石」になったということです。日本の人口は2008年をピークに減少しましたし、アフリカを除く世界の人口も2050年以降減少することがほぼ確実です。

黒田東彦日本銀行総裁は「念力教」の教祖です。科学よりも念力が大事と考えているようです。2015年6月4日、日本銀行主催の国際会議で、ピーターパンの物語を

引き合いに出して、「『飛べるかどうかを疑った瞬間に永遠に飛べなくなってしまう』という言葉があります。大切なことは、前向きな姿勢と確信です」と述べています。インフレになると確信して行動すると国民に呼びかけ、それを信じる人が「前向き」だということです。

黒田総裁だけではありません。岩田規久男副総裁も、2013年8月28日の講演会で「『人々の期待に働きかける』というわたしの説明を聞いて、おまじないのような話だと思われた方もいらっしゃるかも知れません。しかし、金融政策というのは本来、『人々の期待に働きかけること』を通じてその効果を発揮するものなのです」と述べています。

このように「近代教」を信仰している権力者が、当人は気がついていないのか無意識なのかは定かではないのですが、中世的な呪術の世界に入っているのです。

### 利賀巡礼の旅

鈴木忠志の演劇祭「SCOT SUMMER SEASON」が毎年富山県利賀村で開催され、今年は40周年になります。彼は1976年に岩波ホール芸術監督の職をなげうって、東京から利賀村に拠点を移しています。

近代化とは都市化、工業化のことをいいます。日本であれば、近代化の象徴は東京です。その東京では「芸術の消費はできても創造はできない」といって、当時人口が1500人だった利賀村に拠点を移したのです（現在は500人弱）。近代の頂点であった1970年代にすでに鈴木忠志は創造的な芸術ができなくなった理由を、近代合理性が芸術活動にまで押し入ってきて、近代が人間の最も崇高な活動である芸術の創造性を奪ってしまうと指摘したわけです。

近代はみずから反近代を生むようになったのです。人間の自由を最も尊重するのが近代だったはずですが、その近代が先鋭的な芸術家の自由を邪魔しはじめたのです。

わたしが鈴木忠志の演劇を初めて観たのは2008年、静岡県舞台芸術センターの有度山の施設で開催された「有度サロン」でした。以来、8月末に開催される利賀村のSUMMER SEASONにも毎年欠かさず通いました。おそらく100本は鈴木忠志演出の劇を観ました。通い続けて、あるときふと、毎年利賀村に行くのは、わたしにとって、巡礼の旅だと思ふようになりました。そこに行けば、21世紀のコペルニクスともアドルノとも思われる鈴木忠志の演劇から、不思議なパワーをもらうことができます。

かれは、演劇はあくまで手段であって、「世直し」をしているといっています。そのことは、代表作の一つ、『リア王』の演出ノート「世界は病院である」の次のような文章に表れています。

「私は、人間はすべからず病院にいたと言った。人は病院である以上、医者や看護婦がいると考えるだろうし、病人の病気は回復の希望があるだろうと考えるだろう。しかし、世界あるいは地球全体が病院だと見做す視点に

おいては、この考えは成り立たない。看護婦も病人そのものであるかもしれないのである。そして病気をなおしてくれる医者という存在は、存在すらしていないかもしれない。

では、医者も看護婦もいないとすれば、だれが病人かすら分からないではないか、という疑問が生ずる。まったくその通りである。しかし、人間は医者や看護婦の存在や助けを借りないでも、自ら率先して自分を含めた人間は病人なのではないかという疑いを持ち続けることはできる。私はこの疑いを持つ人たちが優れた芸術家として存在してきたし、なぜその疑いを持ったのかを公に発表したのが作品と呼ばれるものだと考えている」

「世界あるいは地球全体が病院である以上、快癒の希望はないかもしれない。しかし、いったい人間はどういう精神上の病気にかかっているのかを解明することは、それが努力として虚しいことになるとしても、やはり現代を芸術家（創造者）として生きる人間に課せられた責務だと信じている」

わたしは「芸術家（創造者）」のところを経済学者に置き換え、「快癒の希望はないかもしれない」が、資本主義社会の矛盾はどこにあるのかを解明することが、わたしの責務だと考えるようになりました。

『リア王』とともに代表作である『世界の果てからこんにちへ』（以下『果てコン』）は、日本の大半の人がバブル崩壊を認識していなかった1991年の初演です。

老人ホームの院長は強欲な資本家を思わせ、入居者は搾取されている労働者を思わせます。車椅子の入居者が食事の改善や、もっと広い部屋を要求しますが、第2次世界大戦に出兵し、幻影をみるようになった院長は、敗戦を理由に断固拒否します。

戦後70年たって、グローバル資本主義に蹂躪された「グローバル株式会社」の経営者も賃上げを要求されると、劇中の老人ホームの院長が入居のスペースを一人3畳から2畳へと狭くしたように、そんなことをすればグローバル競争に負けるのだといって、労働の規制緩和を断行し賃金を引き下げました。

その一方で、院長が好物のうなぎをこっそり外食で食べているように、「グローバル株式会社」はこっそりと節税に励んでいることが「パナマ文書」で明らかになりました。「パナマ文書」は告発によるものでしたが、『果てコン』では入居者が院長の娘からこっそり情報を得ていました。いわゆるスパイ作戦です。

ラストシーンでは、院長が僧侶に「おまえたちにも日本の病は手に負えぬというのか」と尋ねるのですが、肝心なときに僧侶は無言です。既成概念にとらわれて杓子定規な僧侶は、舞台では底を抜いた籠に腰から下をすっぽり入れ、消化過剰か消化不良かどうかでもいような議論を延々としています。そうこうしているうちに世界中の大軍1万が日本に攻めてきて「日本が、父ちゃん、お亡くなりになりました」と院長の娘が報告します。

これはグローバル資本主義が押し寄せてきた21世紀の日本と同じです。「資本主義がお亡くなりになりました」

と置き換えることができます。杓子定規な霞が関の官僚や日本銀行に聞いても、いつも同じ答えしか返ってこない。そうこうしているうちに、マイナス金利になりました。

鈴木忠志は、解決策は自分で考えてといいますが、演出の中に密かに、解決策を潜ませているのではないかと思います。

『果てコン』の入居者は「歴史よ それを捨てられたら お前は休めるのに 眠れるのに」と叫びますが、わたしは8年通ってようやくこれを、21世紀の「日本株式会社」に置き換えて、「資本主義よ 強欲を捨てられたら ゆっくりできるのに 寛容になれるのに」「株式会社よ 現金配当をやめたら、お前は休めるのに」という結論に達することができました。

わたしの提案を「後ろ向き」と考えるのか、「前向き」と考えるのか、その判断は、この本を手にとってください方にお任せします。

なお、本書を上梓するにあたって、母校愛知県立旭丘高校の同期の川村容子さんには多大なるご尽力をいただきました。やはり高校の1年後輩でディスカヴァー・トゥエンティワン社長の干場弓子さんから、「資本主義の終焉」のその先についての執筆を依頼されながら2年以上火のつかなかったわたしに、「株式会社の終焉」という素晴らしいテーマを提案し、編集の労までとってくださいました。彼女はちょうど敏腕編集者として鳴らした大手出版社を退職したところであり、また彼女と干場社長は高校時代からの親しい間柄でした。

その後もなかなか筆が進まないわたしでしたが、この「より近い」関係と、彼女たちの「寛容さ」（と時に厳しい叱咤激励）のおかげで、「ゆっくりと」ではありましたが、当初思っていた以上に「その先」まで行くことができました。その意味で、本書は、旭丘高校三人組の合作ともいえます。この場を借りて二人に感謝申し上げます。

2016年9月5日 利賀巡礼の旅を終えて  
水野和夫



コモンセンスプレス vol.028

2016年9月発行

株式会社コモン・センス

105-0004 東京都港区新橋2-16-1 ニュー新橋ビル402-1

tel. 03-5521-1021

fax. 03-5521-0150